

いわゆる自発について

—山形市方言を中心に—

森 山 卓 郎
渋谷 勝 己

要 旨

これまで、自発というカテゴリーは、多くの文法書で触れられているにもかかわらず、本格的に取り上げて論じたものはほとんどない。そこで、自発を生産的カテゴリーとして有する山形市方言を取り上げ、1 自発の形態、2 無意志動詞化という意味論の問題、3 ヴォイスとの関係、4 自発における主語の位置付けの問題、5 無意志動詞化と性質叙述、6 可能との関係、などについて論じ、自発の意味論的・統語論的実態を山形市方言と共通語の対照を通じてとらえた。これによって漠然ととらえられてきた自発というカテゴリーが明確になった。

1 問題のありか

山形市方言^{注1}には、

コノ 靴 オレサ ハガタ。

(この靴が、私にはけてしまった。=この靴が私の足に入った。)

のように、自然とそうになってしまう、という意味での自発の形式(ラル自発)がある。ここでは、ヴォイスの形式である自発形式が、どういう意味関係から動きの発生の方を表すのかという、統語論的な問題とともに、動きが自発的に発生するとはどのようなことかという意味的な問題を、山形市方言における自発を中心にした諸現象を記述しつつ考えてみたい。

2 従来の研究—自発というカテゴリーの位置付けなど—

まず自発の概念についてであるが、意味的には、字義通り、自然に出来事が発生するという意味であるということができる。しかし、その形態論的な扱いにおいては、現代共通語において、三つの立場がある。

一つは、「釣れる」などの-eru形だけを自発として考える立場(寺村1982)である。「あるもの(X)が、自然に、ひとりでいる状態を帯びる、あるいはあるXを対象とする現象が自然に起きる」(271頁)という意味的な定義がされ、-eru形が自動詞でなく弱いながらも生産的な文法要素であるという扱いがされている。

一方、-eru形とレル・ラレルを共に自発の形式と認める立場もある。松下大三郎1930では、「自然的被動」として、「自然的被動は被動の形式を以てして原動が自然動(非意志的の動作)であることを表すものである。」(362頁)としているが、同時に「転活用及び『られ

る』の『ら』を省略した方は心的作用の動詞ばかりでなく一般の動詞に博く用ゐられる。」として「泣くまいとしても泣ける」「笑へてしやうがない」のような例も挙げられている。ここでは意味的に自発を表すものとして、-eru 形の動詞(自動詞的なもの)も含まれている。新しいところでは、『日本文法大辞典』が同じく、「泣ける」等の-eru 形の一部の動詞とラレルを自発として定義する(藤井 正)。

これらに対し、自発をラレルという形態に絞って考える立場もある。山田 1936 には、「その勢の起こる本源は大自然にありて」「大なる受け身なりといふべきなり」と説明されている。最近では、森山 1988 が、レル・ラレルという形態の用法として、受け身の構文に連続しつつも、格助詞の選択や主語性の保存など、違った統語論的特徴を持つ自発というカテゴリーを設定することを主張している。

共通語におけるレル・ラレル自発の特徴を明らかにする意味も含めて、簡単にこの問題に触れておく。第一に、共通語の自発では、確かに、

故郷が懐しく思い出される ↔ 故郷を懐しく思い出す

のように、まとの受け身と同様の格の交替現象が起こっているが、まとの受け身が、太郎は二郎くによつて／から↓殴られた

のように、格助詞を——例えばカラ置換には方向性が必要であるとか、生産動詞ならニヨツてでなければならないなどといった制限つきではあるが——別の格助詞に置換することがあるのに対し、自発では、

故郷が私↓に／*によつて／*から↓懐かしく思い出される。

のように、基本的に二格以外の格助詞を選択できない。第二に、自発においては、

私↓は／cf.には↓故郷が懐かしく思い出される。

*太郎が二郎は殴られた。

のように、さらに格助詞がなくてもかまわない。このように、共通語における自発は、レル・ラレルという形態ではあるが、まとの受け身とは違った用法を持つものとして別のカテゴリーと考えられるのである(詳しい検討は森山 1988 に譲る)。

ここでは、以上のように共通語における自発をレル・ラレル形に絞って考える立場をとる。何よりも-eru 形そのものは、山形市方言にも存在しているし、-eru 形を自動詞でなく、わざわざ自発として考えなければならない根拠は薄いからである。さらにレル・ラレルを対照することで、受け身の形式に連続的な文法操作として自発が考えられるということもある。

自発の形態が独立しているのは、山形市方言に限らない。ほかにも、北海道・東北北部にもナカサル・カカサルのような未然形接続の助動詞(ラ)サルによる自発形式が見られる(国立国語研究所 1982・86 図、同 1980・41 図)。ただし、山形市方言は、(ラ) という形態であるのに対して、いずれも、(ラ)サルという形態である点に違いがある。これらの自発形式について報告したのものとしては、北海道についての石垣 1982・小野 1982、青森についての豊巻 1953・此島 1960、岩手についての小松 1961・本堂 1982、秋田についての北条 1961 がそれぞれ挙げられる。

なお、ほかに、栃木県江曾本村(大橋 1962)、静岡県大井川流域(寺田 1957・中田 1981)にも、(ラ)サル形による自発が報告されている。特に、中田 1981 は、従来の単なる表現の存在の指摘にとどまらず、地理的分布と意味の分節の関係を記述的に述べたものである。しかし、統語論な配慮や共通語との対照はされていない。そこで、本稿ではこのような点にも留意しつつ、山形市方言の(ラ)ル自発を考察し、さらに、自発というカテゴリーの全体像を明らかにすることをめざす。

3 自発形態について

自発の形態は、受け身や可能とは別なものとして、動詞未然形に後続する。次のような形をとる。四段(五段)動詞カク(書く)を例にして状態形も併せて示す。^{注2}

		基本形	自発形(四段型)	受身形(下一段型)	可能形 ^{注3}
非状態形	非完了形	kagu (書ク)	kaga-ru (書ク+自発)	kaga-reru (書カレル)	kagu-i (書ケル)
	完了形	kai-da (書イタ)	kaga-φ-ta (書ク+自発+タ)	kaga-Q-da (書カレタ)	kagu-i-ke (書ケタ)
状態形	非完了形	kai-Qda (書イテイル)	kaga-φ-Qta (書ク+自発+テイル)	kaga-Q-deda (書カレテイル)	——
	完了形	kai-Qda-ke (書イテイタ)	kaga-φ-Qta-ke (書ク+自発+テイタ)	kaga-Q-deda-ke (書カレテイタ)	——

()内は共通語の対応形式

4 無意志動詞化としての自発

4.1 山形市方言の自発の意味

以上のような形態は、基本的には生産的(文法的)なものである。このような山形市方言における自発の意味とは、基本的に、無意志動詞化 deagentivization であるとまとめることができる。無意志動詞化とは、

勉強スッパテ オモツケノニ 机サ向ガタラ イヅノマニガ 寝ラタツキヤ
(勉強しようと思っていたのに、机に向かったら、いつの間にか寝てしまった)

のように、意志によらないで(意志に反して)動きが成立してしまうことを表す。これは、次のような現象から明らかである。

4.2 共起しない助動詞類

第一に、いわゆる助動詞類との共起関係である。自発形式に、使役化の形式のスルコトニスル・シテミル・シテオクなどの後続ができない。これらの形式はすべて、動きの主体性(意志性)に拘わるものである。

*明日 キライナ ヤツサ 会ワツコトニスル。

キライナ ヤツサ 会ワル。

(嫌いな奴に会ってしまう。)

(50) いわゆる自発について

*宿題 シッタ ウツ 寝ラテミダ。

宿題 シッタ ウツ 寝ラタ。

(宿題をしている内、寝てしまった。)

4.3 共起する副詞類

第二に、自発形式は、ワザワザ・ワザドなどの主体的な副詞と共起せず、ヒトリデニ・イツノマニガなどの非主体的な副詞と共起するということが挙げられる。このことも自発が無意志の動きを表すことを示す根拠になる。

*禁酒 シッタケノニ ワザド 酒 飲マタキヤ。

禁酒 シッタケノニ イツノマニガ 酒 飲マタキヤ。

(禁酒していたのに、いつの間にか酒を飲んでしまった。)

4.4 共起する動詞類

第三に、自発形式は、基本的に、意志動詞ならばどんな動詞でも共起することができる。逆に「切れる」「始まる」などの全くの無意志動詞に共起することはない。例えば、

*ホノ 綱 キレラタキヤ。

(その綱がきれてしまった)

のようには原則として、言えないのである。ただし、これには、例外となるような問題が二つあり、個人的な判断によるゆれも見られる。

一つは、本来的に無意志動詞化の機能を持つ自発の形式が、無意志動詞化ということからさらに進んで、動きの責任回避性のようなものへと意義的な拡張を起こしているというものである。この場合、意味的にも、自発形式が共起する方が自分の責任がないということを表す。これは、次のような例から明らかである。

別ニ 帽子バ 脱グ 気デ イダノ インネ。ヒトリデ 脱ゲラタンダ。

(別に帽子を脱ぐ気でいたのではない。ひとりでに脱げてしまったのだ。)

cf 帽子ガ 脱ゲダ。

(帽子が脱げた。): 自動詞

二つめは、語彙的に特殊なもので、ごくわずかの特別な自動詞に共起するものである。これは、もともと自発的な意味を表す自動詞に、意味を変えることなく共起するものであり、生産的な(ヴォイス)現象とは言えない。例外的な現象とみるべきものである。例えば、

コノ フタ ヤット 開イダ。

(この蓋 やっと開いた。)

と同じ意味で、

コノ フタ ヤット 開ガタ。

のように言うこともあるのである。この場合、責任回避的なニュアンスは全くない。ただし、この種の自動詞は、「開く、点く」くらいなもので、かなり語彙的な個性があり、同じ自動詞でも、例えば「閉マラタ、消エラタ」などとは言えない。

4.5 自発とテシマウ

特に共通語において、自発に意味的に対応する形式に、テシマウがある。ただし、テシ

マウは、

送ってはいけない手紙を、わざと先生に送ってしまうことにした。

のように、意志的な動作であっても、それが望ましくないと感じられる場合に使用されるので、用法はかなり広いことになる。この点は山形市方言でも同様で、例えば、

俺 ワレ ゴド 見デスマタ。

(俺、悪いことを見てしまった。)

のように、テシマウを使用することができる。さらに、

俺サ ワレ ゴド 見ラテスマタ。

(俺、悪いことを見てしまった。=「悪いことが俺の目に入ってしまった」というようなニュアンス)

のように、自発の形式と共起することもある。この点の意味的な違いは極めて微妙であるが、単に「見ラタ」というよりも、かなり悪いというニュアンスがある。このニュアンスの違いは、次の例に明らかである。

俺 酒 ノンデスマタ。

(私は酒を飲んでしまった。)

俺サ ヤット 酒 ノマタ。

(私はやっと酒が飲めた。=「酒がやっと口に入った。」というニュアンス)

*俺サ ヤット 酒 ノマテスマタ。

すなわち、「ヤット」のような良いことを期待するという含みのある副詞は、テシマウの方とは共起しないのである。

以上詳しく検討したことによって、山形市方言における本質が、無意志動詞化という点にあることが明らかになった。

5 自発とヴォイスの現象としての無意志動詞化

そこで今度は、自発による無意志動詞化の意味・統語論的機構について考えてみる。

5.1 共通語における意味・統語論的機構

共通語において自発と呼ばれる構文では、

私は昔を思い出す。

に対して、

私(に)は昔が思い出される。

のように、もともと対象格にあった「昔」をガ格で取り上げ、逆に「私」を与格扱いにする。この現象は、主語「私」の動きに対する支配関係(制御関係)を切り、「私」を動きの間接成分から言わば降格するということである。この点は、先述の通り、まものの受け身と同様の関係である。

太郎は次郎を殴る→次郎が太郎に殴られる。：受け身

私が昔のことを思い出す→昔のことが私に思い出される：自発

これによって、全体で人間が主体(動きの主体)となる動きから、一種の自然発生的な動き

——自動詞的なもの——へと、動きのタイプが転化されることになる。

しかし、ここで注意すべきは、文の主語としての地位は、降格現象とはかかわりなく、もとの感情主体(「私」)であるという点である。これは、次のような現象から確かめることができる。すなわち、

先生には昔のことが思い出されなさるそうだ。

のように、尊敬の形式の指向するものが、降格されているはずの旧主語である点や、また、

花子*i*のことが太郎*j*には、昔の自分(**i/j*)のアルバムで思い出されるそうだ。

のように、「自分」の先行詞が旧主語に当たるという点がある。これに対して、受け身では、このような現象は、それぞれ、新たに昇格した主語めあてとなり、

次郎先生は太郎に殴られなされた。(次郎先生への尊敬になる)

次郎*i*は太郎*j*に自分(*i/*j*)の家で殴られた。

のようになる。つまり、共通語の自発では、格の交替ということ自体が、まもとの受け身とは異なった形で起こっていて、むしろ、「～が思い出される」という部分が、全体で一種の自動詞化を起こしているとも言えるような構造になっているのである。

主語性の保存が、その主語(感情主体)において動き(格の降格現象における自動詞化)が自然に発生するという意味と一体化しているところに、共通語の自発の特徴が見いだされる。ただ、その動詞には制限がある。よく言われるように、共通語でのラレル自発は、「思う、考える」のような、主体として人間が関与するような内的 internal な動きにおいてしか観察されない。これは、主体の関与を格構造の上では受け身化することによって、ももとの結合価 valence を減じるという意味で、格の枠組み case frame から外してしまい、今度は、それが、主体において起こる現象であるというとらえ方をすることである。すなわち、ここでの議論からすれば、主語的特性を残す「私には」は、一種の場所成分となっているということになる。述語部分が、自然発生的な現象的な動きとしてとらえられると同時に、それが、ももとの主語においての動きであると保証されなければならないからである。ここから、自発になる動詞が内的な動詞をその典型とするということが導き出されよう。内的動詞においては、動きの場所は、その感情主体であるからである。自発が基本的に生産的なヴォイスの現象でありながら、語彙的な制約を持つということは、こうした事情による。

5.2 山形市方言における自発の意味・統語論的機構

以上の点は、山形市方言にも共通するところがある。まず共通語との共通点を述べ、後に異なるところについて述べる。

山形市方言の自発においては、一般に、

コノ 靴 俺サ ハガタ。

(この靴が俺に履けた。=「この靴が足に入った」というニュアンス)

のように、対象格名詞「靴」が主語化し、本来的な動作主たる「俺」がサ(与格助詞)で取り上げられる。(「サ:与格助詞」が消去されることもあるが、対比的な表現の場合には、「サ」が出現する。)例えば、次のような対比的文脈では、必ずサが出現するのである。

俺 コノ 靴バ ハグ。→

(俺、この靴を履く。)

(おまえには履けてしまわなかったが) コノ 靴 俺サ ハガタ。

(この靴が俺に履けてしまった。)

つまり、受け身と同様の現象が発生し、格関係に交替が起こっているわけである。

これは、共通語と同様の格交替である。しかし、旧主語である主体の取り上げ方には、違いがある。共通語においては、動きが内的なものでなくてはならなかったが、山形市方言においては、何度も述べるように、さらに制約が小さい。内的な動詞以外でも自発の形式が共起するのである。

とはいうものの、意味的な観点からすれば、ここにも共通語に連続する一つの現象を見いだすことができる。山形市方言の自発でのサ格(与格)名詞の出現の仕方である。

山形市方言の自発の構文では、サ格は対比強調する場合を除き、

*俺サ 最近 アルガル。

俺 最近 ナンボデモ アルガル。

(俺は、最近いくらでも歩いてしまう。)

のように、出にくい場合と、

俺サ 最近 本 ヨマル。

俺 最近 本ヨマル。

(俺は、最近、本が読めてしまう。)

のように、出てもよい場合、さらに、

俺サ コノ 靴 ハガル。

??俺 コノ 靴 ハガル。

(俺は、この靴が履ける。)

のように、原則として出なければならない場合とがある。

これらの動詞を観察すると、サ格が出にくい場合は、すでに外部に場所が設定されるような、

俺 最近 街サ ンガラネ。

(俺、最近、街に行けない=行く機会がない。)

のような動詞であり、逆にサ格が出なければならない場合は、動きが主体へ向かってなされるような意味を持つ、

コノ服 俺サ 着ララネグ ナタ。

(この服、俺に着られなくなった。=「入らなくなった。」というニュアンス)

のような動詞である(いわゆる広義の再帰的な動き)。そして、サ格が出ても出なくてもよい動詞は、

最近 俺サ テレビ サツパリ 見ララネ。

(最近俺はさっぱりテレビを見る機会がない。=「テレビが目に入る機会がない」というニュアンス)

(54) いわゆる自発について

のように、とらえ方によって、抽象的な移動の意味(情報の移動など)が考えられるものである。ここから、一種自動詞化された動きが主体(すなわち、もともとの主語)を場所相当にとらえているということがわかる。典型的に、主体における動きとしてとらえられる場合に、自発のサ格が強調されて出現するということが言えるであろう。当然、共通語で言えたことは山形市方言でも言えるのであり、

俺サ 時々 昔ノゴド 思イ出サル。

(俺には、時々、昔のことが思い出される。)

のように、内的な動きでは、場所的などらえ方ができ、サ格の共起が可能である。

ただし、対比強調された場合に、動詞の語彙的な意味にかかわらず、なぜサ格が出現可能なかは、単に場所としてのとらえ方の問題から説明されるのではなく、ヴォイスにおける降格現象の一般的な特性として、格の階層の問題とも関係する別のレベルの問題として説明されるべきであろう^{注4}。しかし、それとは別に、省略を受けやすいサ格がこのように意味的な問題によって、省略されないということも、あくまで事実なのであり、自発におけるもともとの主語(主体)の意味的な位置付けから初めて説明されるのである。

以上のように、自発における格の交替から、自発の自然発生的な意味そのものの規定や、共起動詞の意味的な制約などが、あい関連する現象として説明できることがわかる。(もっとも、先述のように、ごく例外的な現象として、自動詞に自発形式が共起することもある(4.4参照)。これらの例外は、意味的な拡張の結果として動きの責任回避性という特別な意味を担うものであったり、また、語彙的な例外現象と言えるものであり、ここでの議論に矛盾するものではない)。

6 主語の特性

自発の意味が、もともとの主語と関係の無い原因でのもともとの主語における動きの発生という点にあるならば、動きがどのように発生したかを把握することが、語用論的に必要となる。すなわち、動きの発生のしかたは、もっとも典型的には、動きの主体本人が知るものでなければならないことになる。ここから、語用論的な問題として、話し手が自発の現象の主体であるということがでてくる。山形市方言の典型的な自発の文は、一人称主語であり、一人称主語以外なら、視点の移動なり感情移入が必要である。例えば、

俺/?アイツ 畑サ 何ガ ウワッタノ シャネクテ 間違テ 畑サ 入ラタキャ。

(俺/?あいつは、畑に何か植わっていることは知らないで、間違って、畑に入ってしまった。)

では、「間違って入った」かどうかは、動作主体「俺」だけが知りうることなので、原則的に「あいつ」が主語では不自然である^{注5}。

ここから、現代共通語における、ラレル自発になりうる動詞の制約についても、さらに、語用論的な観点から厳密に説明できる。すなわち、自発になるのは、思考、感情、感覚の「考える、判断する、思う、認める、望む、願う」「懐かしむ、嘆く、期待する、」「感じる」などの動詞に限られ、「懐かしがる、おもしろがる」のようなガル動詞、「祝う、飽きる、嫌う」などは意味的に感情・感覚を表しても、自発にならない。これは、基本的に前者が一人称の主語を取る内的な意味ゆえ、動きの発生のしかたを取り上げることができ、後者

がそれができないということを表す。

なお、古典語でも、自発の用法は、現在の調査の範囲では、次のように基本的に、一人称であるか、一人称的な立場に感情移入している場合であると言うことができそうである。

ともかくもいふべき方も覚えぬままに「……略……」とや書かれけむ(更級日記)
相模路のよろきの浜の真砂なす児らは悲しくおもはるるかも(万葉集 3372)

なお、現代では非精神的な動作における自然発生的意味は、

手紙を書いてしまった。

のように、テシマウが代行して表しているようである。テシマウという形式は、格の枠組みに何ら変更を及ぼすことなく、主語の意志性を消すことができるので、その点では便利である。また、テシマウには人称の制限はなく、

彼女は変な手紙を書いてしまった。

のように、三人称の主語でも使うことができる。ただしこの場合は、話し手がその動作に対して望ましくないというとらえ方をしているようなニュアンスになる。

7 自発による性質叙述

以上の考察を通じて、プロトタイプ的に、山形市方言の自発がヴォイスの現象に連続する、いわゆる無意志動詞化の機能を有するものとして位置付けられることが明らかになった(前述のように、無意志動詞化の極端な例(「開ガル」など)もあり、殆ど自動詞の異形態と考えるべきものもあった)。

次には、無意志動詞化とそれに関係する文の述べたての問題、すなわち、動きを表す文か性質を表す文かという違いの問題について、考えたい。例えば、

この魚はおいしいので、どんどん食べてしまうよ。

この魚はおいしいので、どんどん食べるよ。

の意味の違いを考える。前者では、「てしまう」がつくことによって、意志とは別の動きであるということが示される^{注6}。このように、無意志的な動きを示す環境では、「自分がどんどん食べてしまう」ということも表すが、一方「魚」の性質を表す意味も出て、「誰にとってもどんどん食べてしまう」という解釈ができることにならないだろうか。これに対して、後者では、省略された主語の存在が前提とされていて、「どんどん食べる」現象を支配するものとなっていて、「自分(もちろん、感情移入される聞き手などの特定の人物のこともある)がどんどん食べる」という意味しかでてこない。

この現象から、意志的に動きを支配する場合、動作主の存在が必然的に表面に出てくるのに対して、無意志的な動きの場合、動作主の存在が表面化せず、むしろ、いわゆる arbitrary なものに解釈され、そこから、「誰にとっても」という意味になり、さらに、そこから、モノ(対象)の性質を述べるような構文になる。この現象は、森山 1988 によって、無意志支配の性質叙述化の原則と呼ばれたものであるが、動作主の存在と意志・無意志の動きの性質との相関を示唆するものかもしれない。これと同様のことが、山形市方言においても観察される。すなわち、自発の文は、

(56) いわゆる自発について

コノ 靴 ナガナガ ハガラネナ。

(この靴はなかなか履けない。=「足に入らない」というニュアンス)

コノ 酒 ドンドン ノマル。

(この酒はどんどん飲めてしまう。)

のように、「靴」「酒」の性質を述べる文となっていて、動作主の存在を言わないでもよい。この場合、

コノ靴 ナガナガ ハガラネ 靴ダナ。

(この靴はなかなか履けない靴だな。)

のように、連体修飾の構造にして、性質叙述の文と解釈しなおすことも可能である。

このような現象自体は、さらに、自動詞の構文にも連続している。すなわち、「このドアは開く」のように、自動詞の構文ならば、「*このドアは開ける」のような可能形にならないのであるが、すでに性質を述べる文となっているということに関連するのではないだろうか。

8 おわりに

ここでは、共通語と山形市方言を対照することによって、共通語の分析だけでは明らかにできないような、自発というカテゴリーをめぐる諸問題を明らかにすることができた。具体的には、自発がヴォイス的な格の交替現象を起こすと同時に、主語性を保存するという統語論的な特徴を有するということ、さらに、そこから、自発の意味である無意志動詞化ということが導きだされること、そして、無意志動詞化された述語の人称制限の問題や、無意志動詞化が文に性質叙述の意味を与えるということ、などを、統語論的・意味論的に明らかにしえたと思う。

これらのことをふまえて、さらに、一般的な、動詞述語の意志・無意志をめぐる諸問題、意志性(主体性)と格・ヴォイスの関連(他動詞性 transitivity の問題)、文の総合的な叙述の類型の問題(可能表現の総体的位置付けなど)などへと、研究の視野を広げていくことが、可能かつ必要であろう。

おおげさに言うならば、本稿で展開したようなアプローチを、対照方言学と呼べるかもしれない。方言文法における記述を単なる記述に終わらせるのではなく、文法カテゴリーの体系の問題として対照し、理論的な側面に重点を置いた研究を進めることが必要である。本稿は、その一つの試みにすぎないが、方言を対照することは、一般的な文法研究においても、方言文法の記述という観点においても、新たな地平を開くものであることは疑いない。今後は、他の方言での記述・分析を進めるとともに、さらに、可能・受け身の問題などについても、同様の方法によって考えていき、方言における包括的な類型論 typology にまで発展させていきたいと思う。

注1 (ラ)ル自発は、正確な分布地域はわからないが、山形市を中心とした村山地方(東根市、河北町などを含む)で用いられている。

注2 完了形は以下の規則を以下の順序で適用することによって得られる。(ただしこれらの規則

はインフォーマルである。)

入力：動詞連用形(非音便形)+-ta

1 音便化(共通語と同じ)

2 無声化

3 有声化(2、3の規則については井上1968、1980参照)

4 a (四段動詞) 促音便消去：語幹二音節以上の動詞の促音便の消去。[例] フラッター→ワラタ

b (一段動詞) 促音便化：語幹末の-re・-de-の促音便化。[例] キレダ→キッダ

一方、状態形は、動詞連用形(非音便形)+-teta を入力として、上の1~4の規則を適用し、さらに、次の規則5を適用して派生される。

5 teta 融合：語幹末に撥音便・促音便がない場合、状態形接辞-teta は次のように変化。

-teda → Qta

-deda → Qda

状態形では非完了形にすでに標準語の完了形に当たる形を用いているために、完了形には、さらに-keを付加した形を用いるが、齋藤1961が指摘するように、この形式は回想をも表すために、純粹な状態完了形式は当方言には存在しないことになる。

注3 自発と可能とは、よくその意味的關係が問題にされる。共通語においては、

昔のことが思い出される。→昔のことが思い出されない。

のように、自発を否定にすると、「自然に動きが出来る」というような自発の意味が後退し、ニュアンス的には、かなり可能に近くなる(形態的な問題も同様)。

可能にも、意味的に、能力(心情)可能と状況可能との二つが考えられる(関西方言などでは形態的にも対立する)。

こんな恥かしい手紙を書くことができない(能力：ヨーカカン：京都)

時間がなくて手紙を書くことができない(状況：カケヘン：京都)

能力可能は、状況的には可能であっても、主体の意志心情において、不可能であるということを表す。山形市方言にはこの形態的区別はないが、他方、可能と自発が形態的に対立する。

最近 忙シクテ 街サ イガンネ。(状況可能)

最近 忙シクテ 街サ イガラネ。(自発)

この二つは、「状況的に行けない原因がある」という点では共通している。しかし、意味的には、前者が「忙しいから行くわけにはいかない」というように、基本的に自分の判断が介入できるのに対し、後者が「忙しさが自分を行かせない」というように、もっぱら外的な原因の問題であり、自分の判断の介入する余地はないという違いがある。

そこで、これらを連続的に考えてみると、

	能力可能	状況可能	自発
動作実現を左右する主体の力	++	+	0/-

というように考えられる(一は意志あるいは主体の力に反して動作が実現しないことを表す)。従って、たとえ、

俺 ミチコちゃんサ 「好ギデス」テ 言ウダインダгент ハズガスクテ 何モ 言ワラネンダ。

(俺、ミチコちゃんに「好きです」って言いたいんだけど、恥ずかしくて何も言えないんだ=「言葉が出でこない」というニュアンス)

のように、一見、原因が主体内にあるように見えても、自発の形式を使った場合、実際には、

(58) いわゆる自発について

自分の内部に自分と対立するものとして何かがあり、それによって動きが起こらないと把握されることになる。つまり、自発の意味には能力・状況といった対立はない。

注4 山形市方言では、受け身の動作主は、ガラ格によって表される。

コノ建物ハ先代社長ガラ建デラッダ。

太郎ハ次郎ガラ殴ラッダ。

なお、共通語では、ガ、ヲ、カラの順で、連体化の「ノ」の共起、ハとの共起、さらに、数量詞遊離などの格（あるいは格表示）に関する現象が位置付けられる。受け身においても、難易文、可能文でも、もとの動作主は二格で取り上げられるが、これも、ガ、ヲ、ニという格の関係（表示）の問題に深いつながりがあるように思われるが、詳しいことは別の機会に考察する。

注5 ただし、

アイツ 畑サ 何ガ ウワツタノ シャネクテ 間違テ 畑サ 入ラタラスイ。

（あいつ、畑に何か植わっていることは知らないで、間違って畑に入ってしまったらしい。）のように、認識的なムード形式 epistemic modals があれば、この人称に制限はない。ムード形式によって、情報（動作の起こり方に関するとりえ方）が、すべて話し手が認識したこととして位置付けられ、その情報の直接的な持ち主でなくとも、アクセスできるからである。

注6 すでに述べたように、テシマウが無意志化を直接表すわけではない。しかし、もともと歓迎しない動きであるという意味をテシマウは持つので、事実上、共通語では、無意志的な動きはテシマウによって近似的に表されることになる。

[参考文献]

1. 飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編（1982）『講座方言学4 北海道・東北地方の方言』国書刊行会
2. 石垣福雄（1982）「北海道沿岸部の方言」（文献1所収）
3. 井上史雄（1968）「東北方言の子音体系」言語研究52
4. ———（1980）「言語の構造の変遷」（『講座言語1 言語の構造』大修館書店）
5. 大鹿薫久（1987）「文法概念としての『意志』」ことばとことのは4 和泉書院
6. 大橋勝男（1962）「栃木県江曾島本村方言の『サル』ことば」国文学攷27
7. 小野米一（1982）「北海道内陸部の方言」（文献1所収）
8. 国立国語研究所（1980）『表現法の全国的調査研究』
9. ———（1982）『方言文法資料図集（2）』
10. 此島正年（1960）「方言と共通語との交渉」弘前大学人文社会22
11. 小松代融一（1961）「方言の実態と共通語化の問題点 岩手」（文献15所収）
12. 斎藤義七郎（1961）「方言の実態と共通語化の問題点 宮城・山形」（文献15所収）
13. 寺田泰政（1957）「大井川流域方言の概観」国語研究6
14. 寺村秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味I』くろしお出版
15. 東条操監修（1961）『方言学講座2 東部方言』東京堂
16. 豊巻英吉（1953）「南部（八戸）方言に於ける自動詞について」国語学12
17. 中田敏夫（1981）「静岡県大井川流域方言におけるサル形動詞」都大論究18
18. 藤井正（1971）「自発」（『日本文法大辞典』明治書院）
19. 北条忠雄（1961）「方言の実態と共通語化の問題点 秋田」（文献15所収）
20. 本堂寛（1982）「岩手県の方言」（文献1所収）
21. 松下大三郎（1930）『改撰標準日本文法』中文館書店（復刊1974、勉誠社）
22. 森山卓郎（1988）『日本語動詞述語文の研究』明治書院（印刷中）
23. 山田孝雄（1936）『日本文法学概論』宝文館

【付記】

山形市方言の資料は、山形市生え抜きの、浅田秀行（昭34生）、渋谷健（昭7生）、渋谷勝己（昭34生）により、京都方言の資料は生え抜きの森山卓郎（昭35生）による。

なお、本稿は全くの共同執筆である。方言を異にする両者の議論によってこの稿を完成することができた。

——もりやま 大阪大学講師、しぶや 大阪大学助手——